

第2節 東日本の環濠集落からみた午王山遺跡

小 倉 淳 一

1 はじめに

午王山遺跡は南関東地方における弥生時代後期の環濠集落の好例としてよく知られる存在である。しかし、遺跡内の小区域を対象とした調査が断続的に進行したこともあり、これまでその全体像については解明が進んできたとはいえなかった。また、環濠下層からの出土資料が比較的少ないなど、環濠の所属時期が必ずしも明確ではなかったことも、本遺跡の評価を難しくしてきた。

今回の総括報告書作成にあたって、これらの問題を解消し午王山遺跡の環濠集落像を再構成することが、今後の弥生時代集落および社会の検討に資することは論を待たない。午王山遺跡を東日本の環濠集落遺跡としてどのように位置づけるかについての議論は、本報告をもって本格的に始まることとなるはずである。

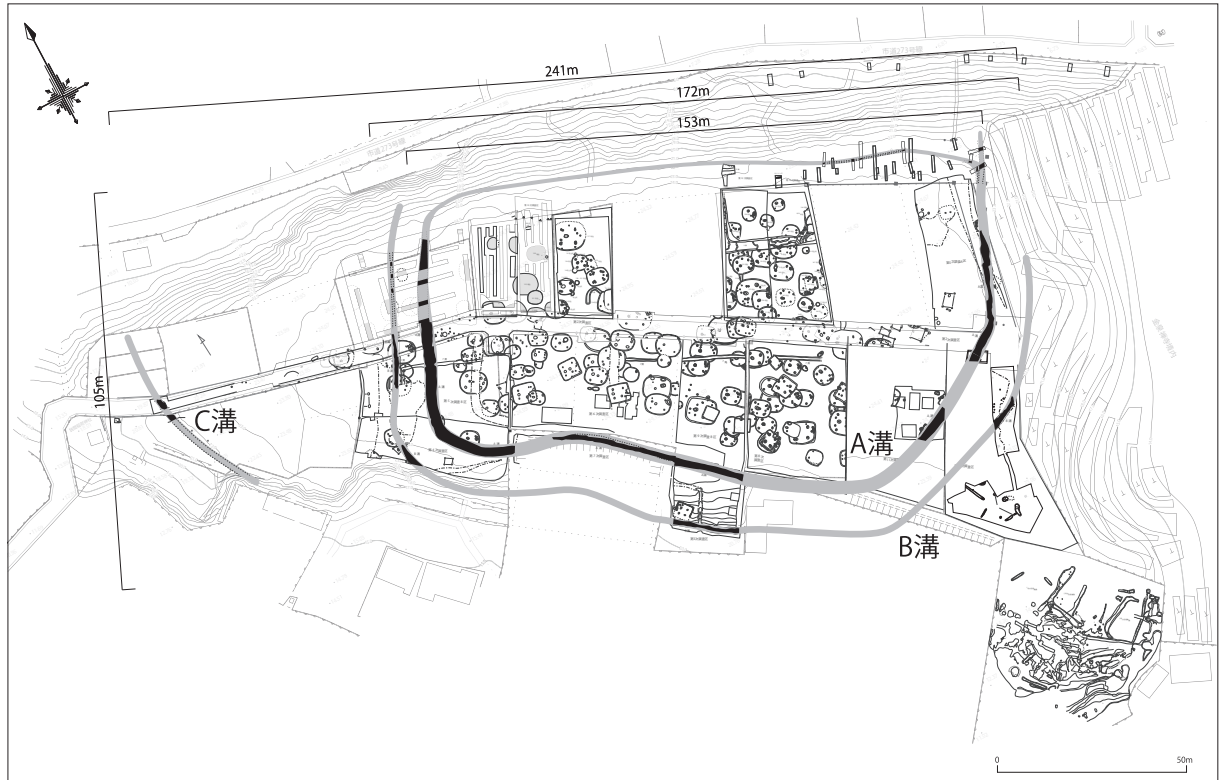
筆者はこれまで関東地方の環濠集落を集成するとともに、それらの大別的な所属時期、環濠の規模、展開過程などについていくつかの検討を行ってきた（小倉 2015・16・17）。中期の環濠とそれ以降の環濠との間に規模の上でかなりの差があり、後期の環濠は掘削土量の点でも小型化が進み、省力化された環濠として設置されていることについて数値を提示しつつ論じてきたところである。

本稿ではこうした視点に基づき、これまで本格的な検討に乏しかった午王山遺跡の環濠のあり方を復元するとともに、その特質に関する現状の理解をまとめておくこととしたい。筆者の力量では東日本全体を扱うことは些か荷が重いこともあり、主に関東地方の環濠集落を中心として諸種の問題について考えてみることをおこたわりしておく。

2 午王山環濠の全体像

a. 3条の溝の存在

午王山遺跡はすでに一部が削平され、遺跡南部を中心に旧地形が失われている部分があるが、これまでの15次に及ぶ調査の成果を元にとすると少なくとも3条の溝の存在を認めてもよさそうである（第217図）。総括報告書策定委員会ではこれをA溝・B溝・C溝と命名した。A溝は午王山頂部の平坦面を中心に設置され、集落内の多くの竪穴住居を取り囲む溝で、環濠と考えているものである。第2次・第3次・第4次・第5次・第7次・第10次・第11次調査などで検出され、遺跡北側の斜面に沿って設定したトレンチ調査において発見されている溝にも続いているものとみられる。A溝の外側に、一見してA溝と並行するように掘削されたようにみえる比較的規模の小さな溝がB溝である。第2次・第3次・第4次・第5次・第10次調査において検出されており、現地踏査による地形確認を行った結果、この溝は全周せず、遺跡北端の崖で途切れるものと考えられる。A・B溝間の間隔は第2次・第5次調査区において最も狭く7m程度、第3次調査区および第10次調査区においては間隔が広がり12m程度となる。これらの溝とは別に、傾斜を強めながら下っていく午王山の西端部を南



第 217 図 午王山遺跡の環濠推定復元案

北方向に走る溝がC溝であり、第2次・第13次調査区から検出されている。この溝は南部の崖面において断面が確認されており、等高線に沿いながら弧を描くように設置されたものとみられる。なお、本稿ではC溝を広義の環濠と位置づけるが、本来の意味においては条濠という名称と呼ぶ方が適切であろう。

b. 環濠の時期と重複遺構

午王山遺跡では、A溝においてその中層・上層を中心に土器の出土が顕著であり、B溝では出土遺物は少なく、C溝においてはほとんど遺物が認められなかった。

総括報告書の作成にあたって、本書の中で柿沼幹夫が土器編年の面から時期別の所属遺構を明らかにしており（柿沼 2019, 本章第3節）、その成果によると、午王山遺跡は弥生時代中期後半から後期後半までの集落遺跡であり、その主体は後期中葉前後にある。また、環濠は東京湾岸の土器型式に照らして後期前半の久ヶ原Ⅱ式期古段階に掘削されるものとみられる。この時期は柿沼による当地域の土器編年では下戸塚式中・古期に相当し、続く下戸塚式中・新期になると環濠と重複する形で時期を推定できる堅穴住居跡が営まれる。A溝上にみられる第4次50号住居跡、51号住居跡、B溝上には第4次52号住居跡が構築されている。なお、出土土器の面からはA溝とB溝との間に時間的な差異が存在するとは言い切れない。また、下戸塚式新期になると第5次B区62号住居跡が構築される。これら下戸塚式中・新期から下戸塚式新期にかけては久ヶ原Ⅱ式新段階に相当すると考えられる。

このように出土土器と遺構相互の関係に基づく集落の変遷過程からは、午王山遺跡の環濠が掘削されてから埋没するまでの時期が久ヶ原Ⅱ式期の中に収まること、久ヶ原Ⅱ式新段階において溝の埋没が始まることを想定することが可能である。なお、C溝については時期を特定することができない。

c. 多重環濠の推定

これまでの調査における成果を総合すれば、午王山遺跡の環濠は、地形上の最高所と傾斜の変化を意識しながら配置されているものとみられる（第217図）。A溝は標高25mの午王山最頂部を取り囲むように掘削され、その周囲のやや下った部分にA溝を取り巻くようにB溝が配される。B溝とC溝との間隔は第2次調査区で約60mを測り、C溝はある時期の集落域の西端部を区画するかのように見える。C溝との関係については措くとして、A溝とB溝はそれぞれ無関係に掘削されたものがたまたま等高線状に並行する形となったものではなく、溝相互の平面図上での配置関係を見る限り、どちらかの存在を意識しながら掘削されたものと考えの方が自然であろう。その場合は、わざわざ居住空間を縮小するように後から内側に断面積の大きなA溝を掘ったとは考えにくい。やはり初めに午王山の最高所を意識し、A溝を環濠として掘削した可能性が高いのではないだろうか。問題はその後B溝を同時に掘削したのか、それとも後になってA溝の外側にB溝を設置したものなのかということであるが、少なくともある時点ではA溝・B溝ともに機能していたと考えられよう。すなわちこの想定が正しい場合には、午王山遺跡には二重環濠の時期があったことになる。

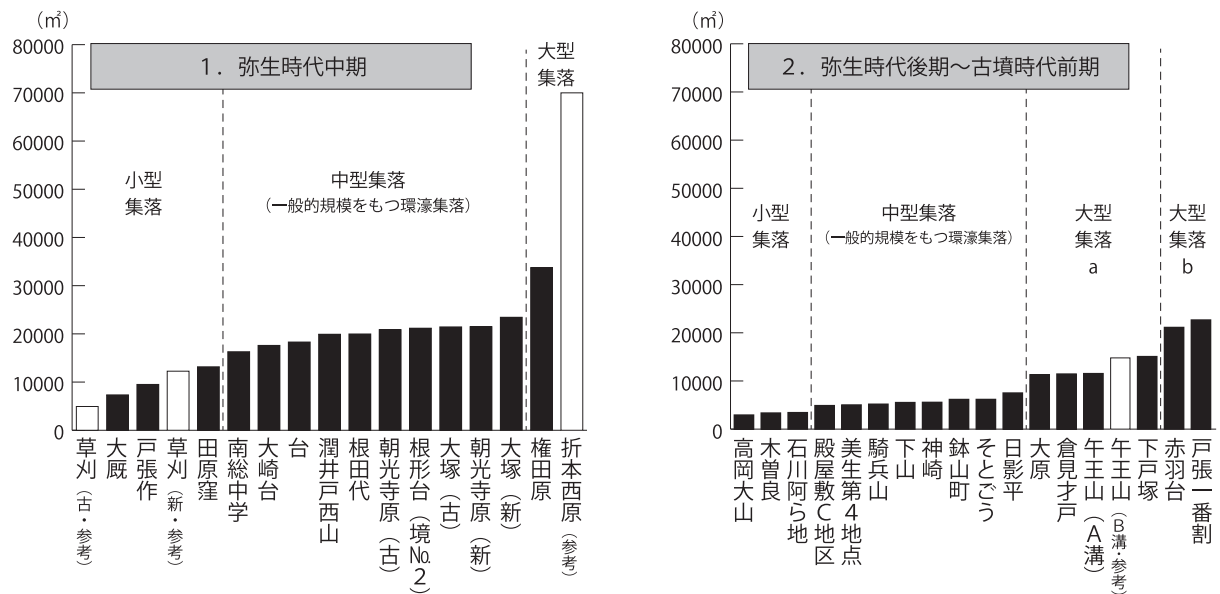
また、前項で触れた通り、久ヶ原Ⅱ式期新段階のうちにB溝が埋没した可能性が高いことは、A溝、B溝が当初から二重環濠として成立していたという想定と矛盾しない。体裁の整った環濠が本来の姿を保っていたといえるのは、久ヶ原Ⅱ式期中のある時点までに限定されるとみておいた方がよさそうである。

d. 環濠集落の規模

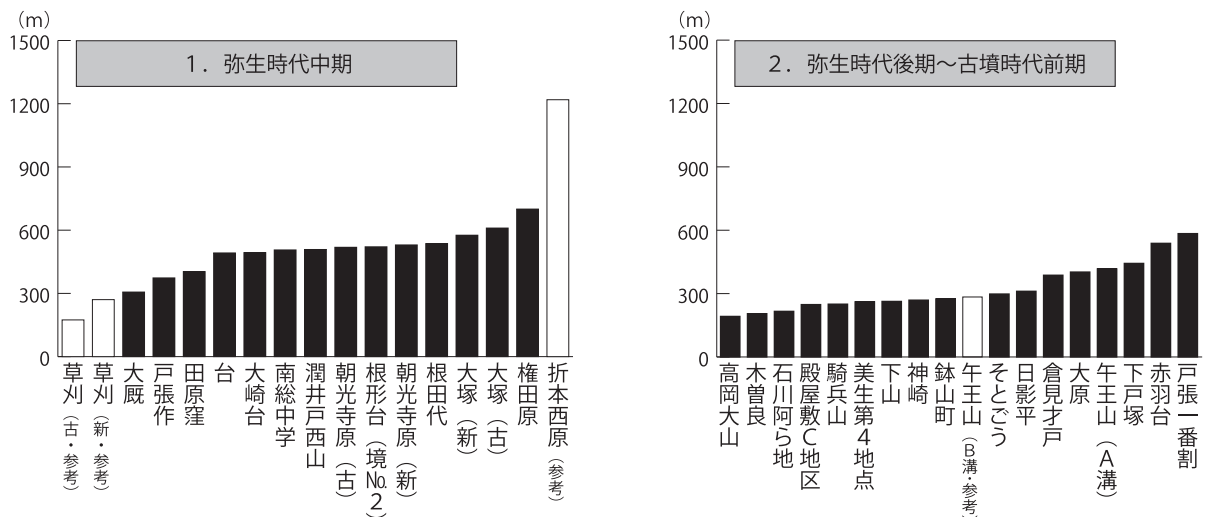
上記の成果から午王山遺跡の溝の全体像を検討してみよう。A溝を環濠とすると、長軸長約153m、短軸長約93mとなる。B溝の長軸長は172mとなり、一回り大きな範囲を区画する。A溝の周長は約419m、溝を含む範囲の面積は11,589 m²と推計される。B溝は全周しないことが前提ではあるが、A溝の範囲も含めて14,000 m²程度の規模を区画すると考えてよいのではないだろうか。これらの溝は午王山の頂部を囲み、集落の「縄張り」を明確化したものとも考えられよう。それではどの程度の溝であったのか、当時の労働量を復元的に考える視点から、簡易的な方法によって掘削土量を見積もることにしよう。

これには小宮恒雄が横浜市大塚遺跡の環濠掘削土量の推定を行った事例が参考となろう（小宮1991）。同遺跡においては当時の生活面（旧地表面）が過度に削平されることなく残存していた部分が多いことから、環濠断面がほぼ当時の掘削状況を反映していたと判断できる箇所があり、環濠断面積の平均値から掘削土量を見積もることができた。その体積は古い環濠（B環濠）で2,730 m³とされ⁽¹⁾、掘削そのものに従事者1人あたり1日3 m³の仕事量としてのべ910人、排土処理と土塁整備のためにその半分の日数がかかると見積もって、30人がかりで約1か月半の工程が推定されている。

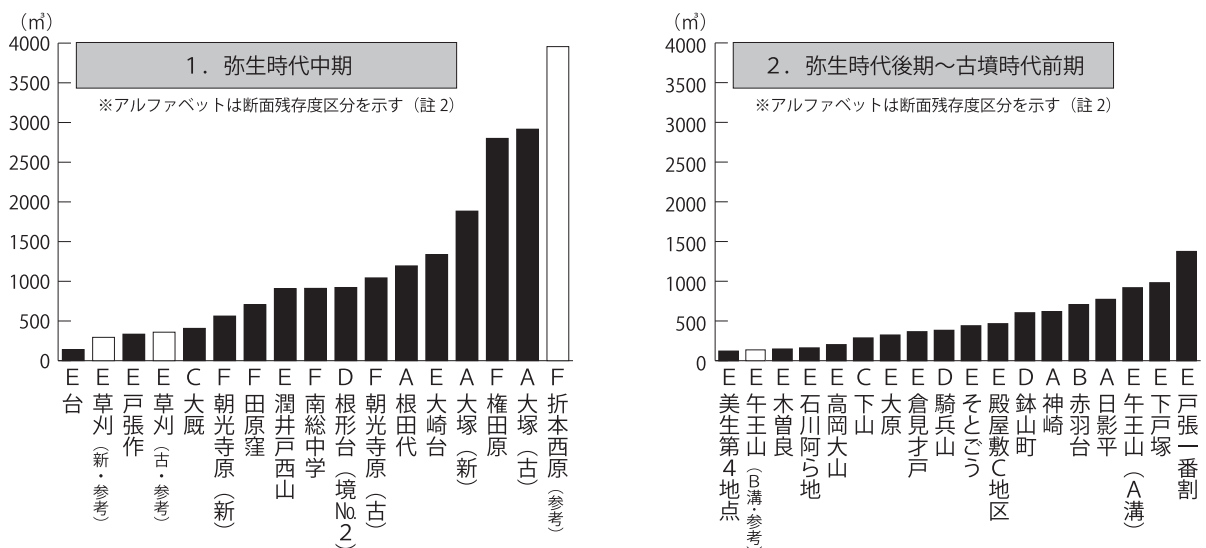
午王山遺跡の場合、第217図に示したA溝の周長が約419mと復元可能である。遺跡上面は耕作等により削平が進行しており、弥生時代の生活面の存在は望みにくい⁽²⁾。このため、最も残りがよいと推定できる第2次調査区（第2号溝として報告）を利用して簡易的に推定を行った。この溝の最大幅は3m程度、深さは1.5～1.7m程度である。3か所の断面図が残されており（本書129頁第192図）、このうち北側（K-K'）と中央（L-L'）の断面が溝



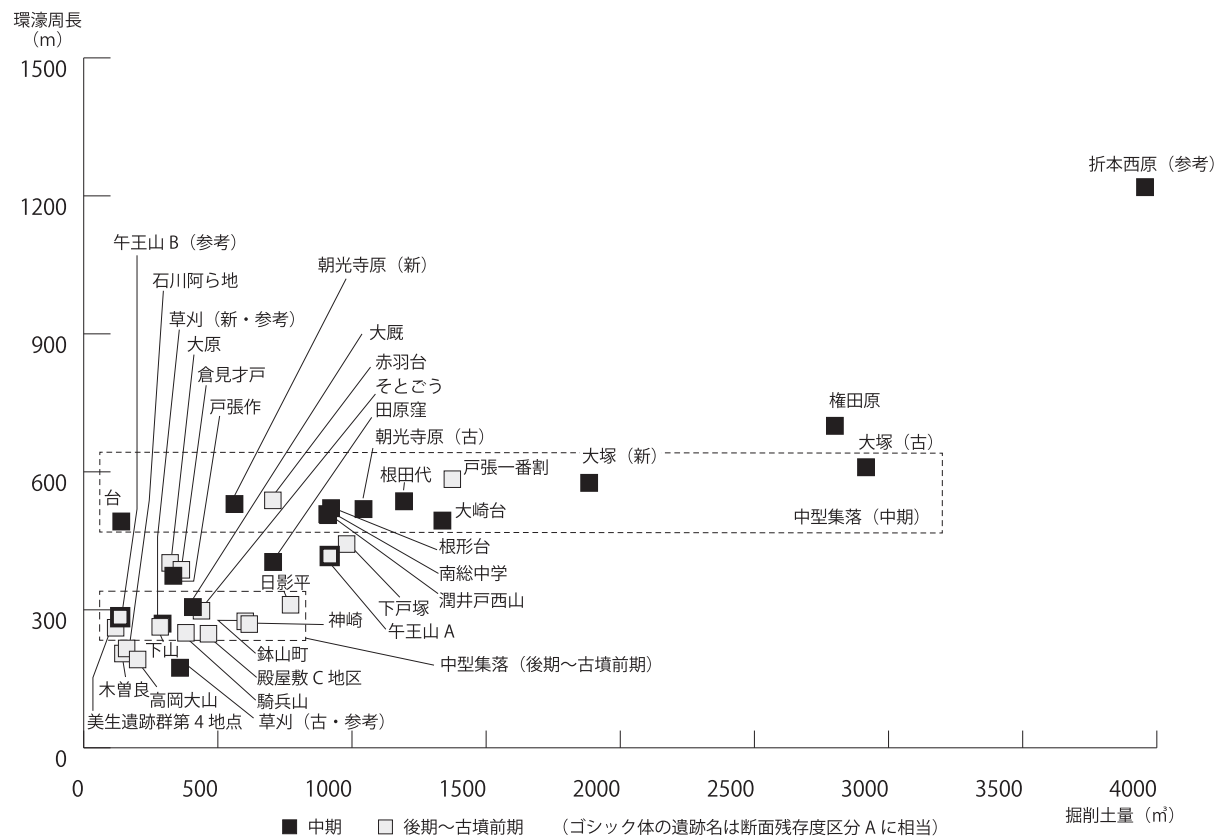
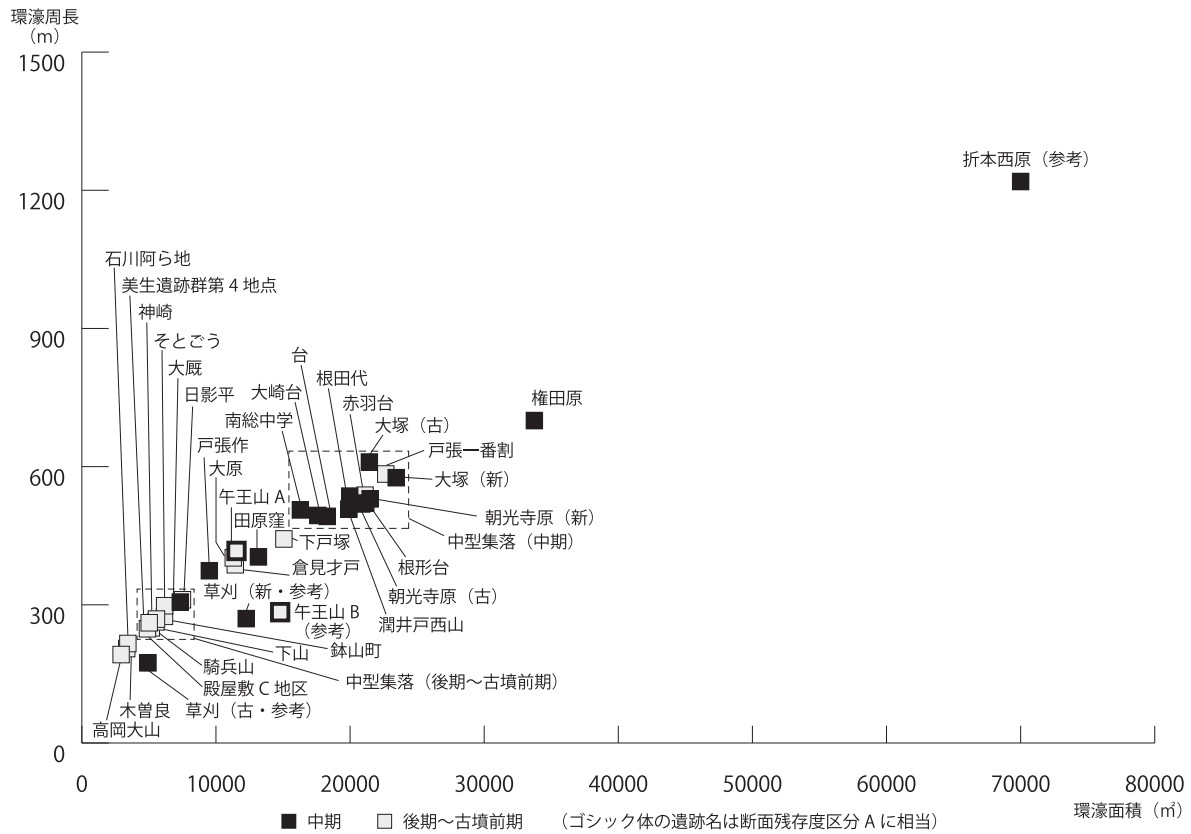
第 218 図 関東地方における環濠の推定面積 (小倉 2015 を改変)



第 219 図 関東地方における環濠の推定周長 (小倉 2015 を改変)



第 220 図 関東地方における環濠の推定掘削土量 (小倉 2015 を改変)



の長軸にほぼ直交していることから推計に適していると判断した。北側の溝断面の面積は約 2.26 m^2 、中央部の溝断面は 2.14 m^2 と計測したため、この平均値を 2.20 m^2 とし、周長を掛けるとA溝の掘削土量は 921.8 m^3 となる⁽³⁾。

B溝は長さの提示が困難ではあるが、図上では 284m と想定した。A溝に比べて小型の環濠とみられ、なおかつ上部が削平されている状況であったため、比較的残りのよい第3次調査区を利用して推定した。溝幅は最大で 2.3m 、深さは最大で 1.2m 程度である。報告書には4箇所の断面図が残されており（本書129頁第192図）、このうち残りのよいH-H'、I-I'の断面積はそれぞれ 0.49 m^2 、 0.47 m^2 であった。これらの平均値を 0.48 m^2 とし、B溝の長さを掛け、掘削土量を 136.3 m^3 と推計した。B溝の規模はA溝に比べてきわめて小さいこともわかる。

これらの数値はあくまで目安となるものではあるが、2条の溝の掘削土量を合計すると $1,050 \text{ m}^3$ を超えることになる。中期の大塚遺跡が長軸長 230m を測り、溝の断面形も逆台形で比較的しっかりと作られた環濠であるのに比べれば規模は小さいが、これらが同時期に掘削された多重環濠であるとすれば、掘削にかかる仕事量はのべ350人となり、10人体制で35日、排土の処理にさらにその半分の仕事量が必要と考えれば、環濠の掘削と整備には10人体制で50日以上（52.5日）かかる計算となる。

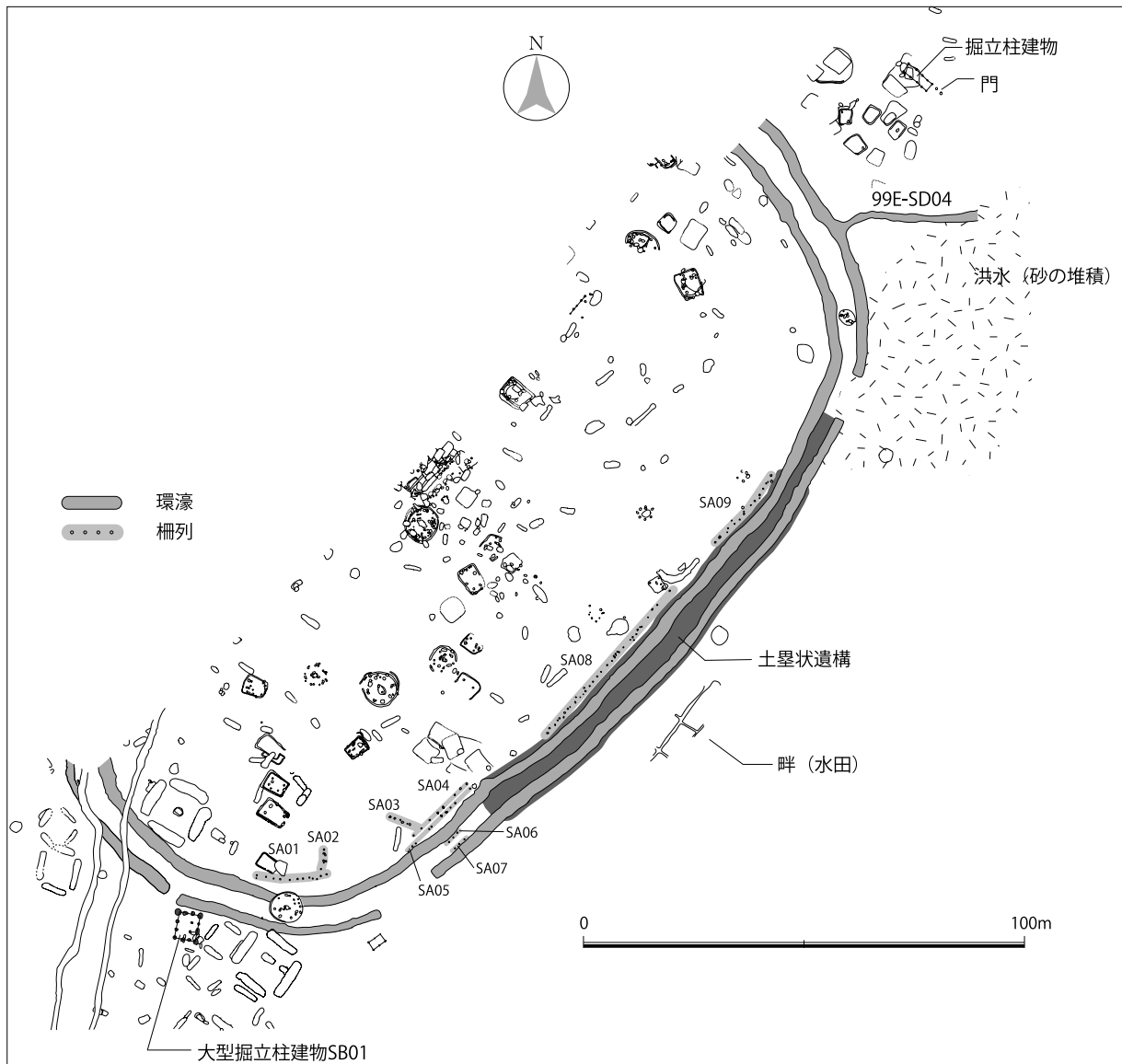
こうした推計をもとに、関東地方全体の環濠集落のなかで午王山遺跡の規模について考えてみることにしよう（第218図～第222図）。環濠面積については、関東地方において面積の推定できる環濠集落全体の中では中程度であるが、中期の環濠の方が比較的大きい傾向にあり、後期から古墳時代前期にかけての環濠集落に限ってみれば比較的大型の部類に入る（第218図）。溝の長さ（周長）については、B溝は全周しないため参考値であるが、A溝はやはり後期の環濠としては比較的大きい（第219図）。面積と周長の相関関係をグラフ化したのが第221図であり、午王山遺跡が該期の中型集落からは規模の面において抜け出た存在であることがわかる。

推定される掘削土量についても同様の傾向を認めることができる（第220図）。午王山遺跡のA溝は後期から古墳時代前期にかけての環濠集落の中では比較的掘削土量の多いことが推定され、掘削土量と周長との相関関係（第222図）においても規模の大きなことがわかる。これに対してB溝はA溝に比べて断面積がきわめて小さく、全周しないことを差し引いても該期の中型集落に比して掘削土量が少ないことが推定される。

このように、A溝とB溝の規模の面からの大きな違いは、集落の旧地表面がある程度削平を受けているとしても、両者の間に看過できない差異が存在することを示しているといえるだろう。これは類例が少ないながらも関東地方の多重環濠の特質として指摘できる事実かもしれない。

e. 環濠の付帯施設

環濠の設営に関してたびたび問題となるのは排土の処理と土塁や木柵などの付帯施設のことである。午王山遺跡においては目立った遺構は発見されておらず、今のところこれら施設の存在を積極的に想定・評価することはできそうにない。多重環濠という前提に立てば、一般に外環濠と内環濠の間、あるいは内環濠の内側に土塁が設けられることなどを想定できる



第223図 猫島遺跡の環濠集落(赤塚・石黒ほか2002を改変)

こともあろう。午王山遺跡の場合、環濠集落1期の竪穴住居跡は内環濠であるA溝から内側におおよそ5m以上離れて構築されており、空間的な規制の存在したほかに、排土を簡単に盛る行為がなされたなどの可能性は残されよう。関東地方の環濠においては概して土塁に関する根拠は乏しいが、群馬県日影平遺跡では環濠内側にローム土を盛った痕跡が認められるという(小池2003)。視野を西に広げれば、静岡県川合遺跡(静岡県埋蔵文化財研究所1985・90)において土塁状の盛り土が検出されているほか、愛知県猫島遺跡においては、土塁状遺構と柵列を伴った中期前葉の二重環濠集落が発見されている(赤塚ほか2002, 第223図)。調査されたのは集落のおよそ半分であるが、低地に営まれており、大塚遺跡の環濠に類似した規模と考えられる。溝の両側に20cmほどの高さの盛り土があるため、溝と溝の間に小さな高まりのある部分が認められる⁽⁴⁾。午王山遺跡が多重環濠をもつと仮定した場合、A溝とB溝との間に土塁を想定できるかどうかは問題であるが、猫島遺跡例のように溝の間隔が揃っておらず、その他の根拠にも乏しいため、溝間が土塁の構築を前提にした空間であったという確証は得られない。

そのほかに環濠の関連施設として想定できるのは橋などの入口施設であるが、実際にその根拠とされるのは、溝内に柱穴状のピット等が認められ橋脚の存在が想定できる場合であり、横浜市大塚遺跡（武井編 1991）においてはその可能性があるものの、実際の橋が残っていたわけではない⁽⁵⁾。また、環濠の中にはある程度埋没した部分に硬化面が残されている場合がある。こうしたものを日常利用していた通路として位置づけることも可能であろう⁽⁶⁾。

これらの施設が存在するとしても、かなり注意深く、なおかつその存在を前提に探さなければ見落としかねないことにも注意が必要である。たとえば横浜市三殿台遺跡（和島ほか 1965）においては、集落内に営まれたと考えられる大型方形周溝墓の存在が調査のかなり後になってから推定されているが（安藤 1992）、これは調査時には方形周溝墓という墓がまだ知られておらず、その認識が全く不足していたことが影響している。また、近年になって同遺跡の中央付近に独立棟持柱の建物が存在した可能性が指摘されてもいる（鈴木重 2017）。午王山遺跡においては遺構が密集してはいるものの、環濠が東西方向に長軸線をもち、南東部に墓域をもっていたことがわかっているだけに、集落に伴う各種施設の推定を注意深く進めていく必要があるだろう。

f. 集落域と墓域

午王山遺跡では第 1 次調査区と第 10 次調査区から方形周溝墓の検出をみており、環濠外に墓域を営むことも確認できる。方形周溝墓は四隅の切れる形態的に古いタイプのものと全周する可能性のあるものが存在するようであり、両者の間には時間差を想定することも可能である。前者は中期に多く認められるため、宮ノ台式期の集落に伴う可能性も残される。これらが集落に近い場所に造営されていることは、午王山の頂部に形成された該期の集落の規模に照らしても妥当である。ただし集落に比較的近い第 4 号・第 5 号方形周溝墓に伴う遺物はなく、土器から時期を確定することはできない。第 2 号方形周溝墓には中期・後期の土器が、第 3 号方形周溝墓にも後期の土器がみられることから、第 1 次調査区の方形周溝墓の中には環濠の時期に伴うものが存在する可能性がある。墓域は本来さらに広がっていたことであろうが、削平を受けて現存していない部分も多い。

3 東日本の環濠集落と午王山遺跡

a. 午王山遺跡の可能性

日本列島の環濠集落は初期の灌漑水稻耕作に伴う文化要素のひとつとして列島に導入され、北部九州地方から中部・関東地方まで広い範囲にわたって営まれたことがわかっている。九州地方では長崎県原の辻遺跡（福田ほか 2005）、福岡県板付遺跡（川道ほか 2016）、同県平塚川添遺跡（松尾ほか 2001・04）、佐賀県吉野ヶ里遺跡（渋谷ほか 2015）などがよく知られ、近畿地方の大阪府池上曾根遺跡（第 2 阪和国道内遺跡調査会 1970）、奈良県唐古・鍵遺跡（藤田ほか 2009）、滋賀県下之郷遺跡（川畑ほか 2017）、東海地方の愛知県朝日遺跡（石黒ほか 1991）などの大型環濠集落も著名である。ただし東日本の環濠集落には巨大なものは少なく、関東地方においては環濠に囲まれる面積がおよそ 30,000 m²までにとどまるものがほとんどである⁽⁷⁾。一方、関東地方では遺跡の発掘例が多く、弥生時代を中心として溝を持つ集落の発見・調査例は 200 以上にのぼっている。その中でも環濠の全体像を推定できるものは現

在のところで 30 例程度に限られ、午王山遺跡もその一例に加えることが可能である。

それらの中でも環濠集落が特に集中的に調査されているのは横浜市域である。鶴見川・早渕川流域では全面的に発掘された大塚遺跡、その墓域である歳勝土遺跡などをはじめとする弥生時代中期後半の環濠集落が数kmおきに点在する様子が判明しており、列島における弥生社会の内実を検討するための格好の素材を提供している。この地域では土器編年研究の深化に伴って流域の遺跡群を動態的に把握しようとする試みが続いており、弥生集落の構造モデルを提供するとともに、農耕社会の定着・展開過程に関する議論もまた深まりをみせている。

午王山遺跡の環濠は荒川流域の弥生時代後期社会を解明するための鍵となるものであるが、周辺の遺跡群との関係を軸とした分析を進めていくことにより、東日本における弥生社会全体の動向を探るための良好な事例となることが期待されるものである。

b. 東日本の環濠集落の特徴

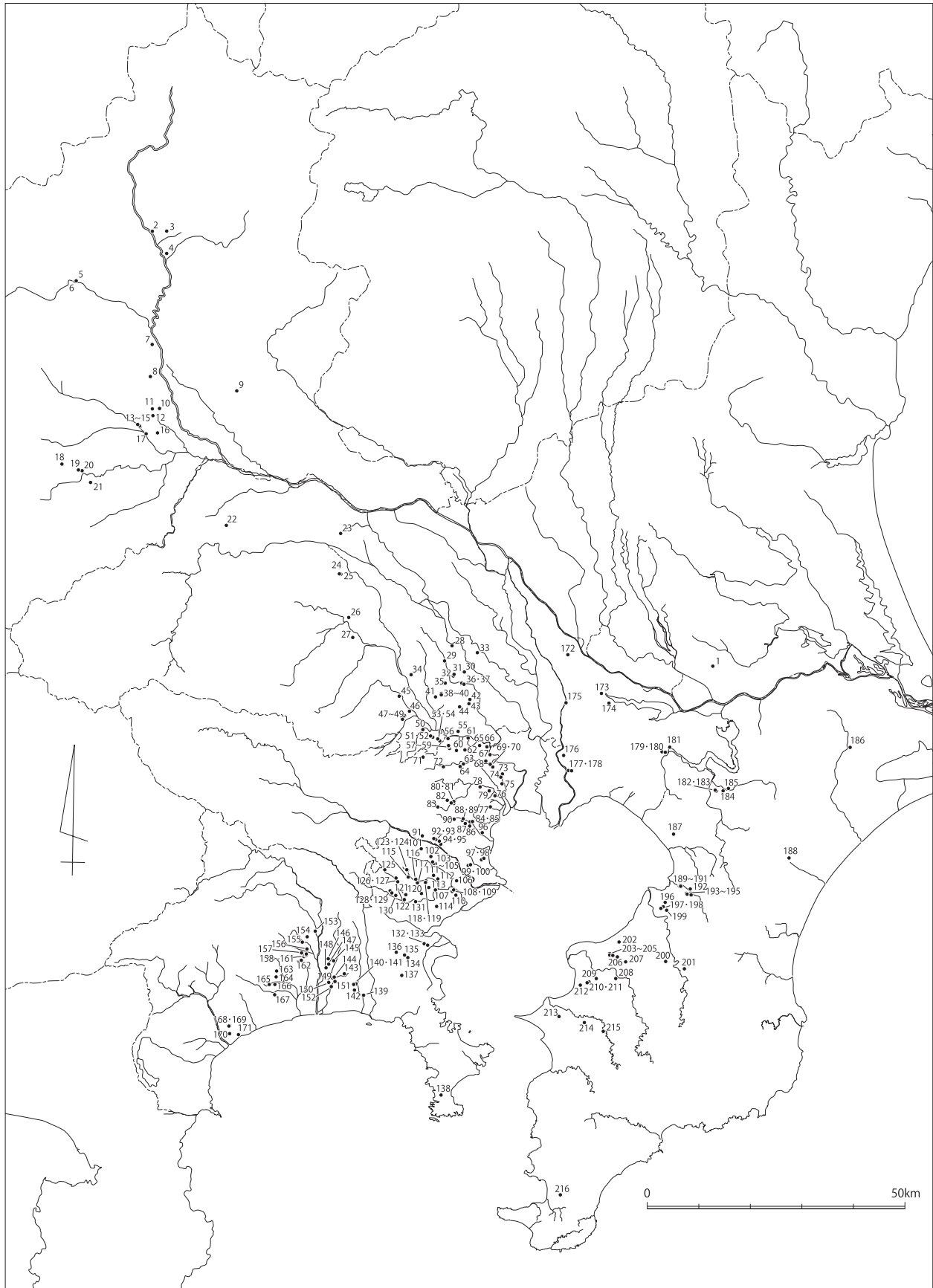
関東地方を中心として、東日本に存在する環濠集落の特徴についてまとめておこう。

環濠をもつ集落の形態は、関東地方においては弥生時代中期後半から一般化する。これは直前の時期から東海地方からの影響を大きく受けたためとみられる。関東地方においては弥生時代前期の農耕集落の存在は明確でなく、本格的な農耕集落とされるものは中期中葉からであり、神奈川県中里遺跡（呉地ほか 1997, 河合ほか 2015）で集落、墓域、生産域の検出をみている。同時期の遺跡は埼玉県池上・小敷田遺跡（中島 1984, 吉田ほか 1991）、千葉県常代遺跡（甲斐ほか 1996）などで発見されているが、中里遺跡の事例が最もよくまとまっている。この時期に伊勢湾岸から駿河湾岸を経て伝播してくる方形周溝墓の形態が東海地方との親密な関係を物語っている。ただしこの時期には環濠の姿は明確ではない。

関東地方の集落到環濠が登場するのは弥生時代中期後半の宮ノ台式期になってからである。宮ノ台式土器は静岡県域の白岩式土器との関係が深い土器で Si I 期から V 期までに区分されており（安藤 1990）、先述した横浜市域における環濠の登場はⅢ期のことである。この時期に東京湾岸を中心とする南関東各地で環濠の形成が始まるものとみられ、千葉県域の養老川流域に属する市原台地、鹿島川が注ぎ込む印旛沼南岸域などでも典型的な環濠集落が形成される。ただし同じ宮ノ台式期といっても、環濠の形成時期には波があり、Ⅲ期の後には V 期に環濠集落の形成が顕著になる（安藤 1991, 大村 2005, 小倉 2017）。その後は上総地域の一部を除いて多くの集落が一旦廃絶するようで、多数の環濠集落が営まれた鶴見川流域においても、多くの遺跡が姿を消している。

後期になると再び集落が増加するとともに、環濠の造営も再開されるが、中期段階の環濠に比して、後期以降の環濠は面積および掘削土量の面で総じて小型化する。午王山遺跡の環濠が営まれるのは後期中葉頃と考えられ、関東地方においては後期後半から古墳時代初頭にかけてはさらに小型化する集落と比較的大型の集落とに分化して集落自体は多様化するものとみられるが、やがて消滅していく。

これら環濠集落の立地は、関東地方では沖積地との比高差十数 m から数十 m の台地上にあるとみられていたが、その後沖積地に立地する集落の事例も認められるようになり、その多様性に対する認識も進んでいる。その解釈については大塚遺跡をはじめとする台地上の集落を畑作集団とする例もある（浜田 2011）が、同遺跡については流域の最初の開発拠点として



第 224 図 関東地方における弥生時代中期・後期の環濠・条濠を有する遺跡の分布
(小倉 2015 を改変)

敢えて台地の高所で沖積地から離れた場所に居住したとする意見（石井 2010）もあり、限られた沖積地の開発を容易に進めるための工夫がなされていることも指摘しうる。

また、関東地方の環濠集落は分布に関しても特徴的である。中部地方以東にみられる環濠集落のうち太平洋側に所在するものは千葉県域までにほぼ限定される。具体的には利根川を境として以東・以北にはほとんど分布しないことがわかっている（第 224 図）。これは方形周溝墓を伴う集落遺跡の分布とも重なり、弥生文化の地域性を示す現象の一端とみられるものである。環濠の分布には、東海地方からの文化的影響を蒙りながらも既存の文化要素を組み替えてそれに対応していった関東地方の集団の範囲が示されているとみるべきであろう。

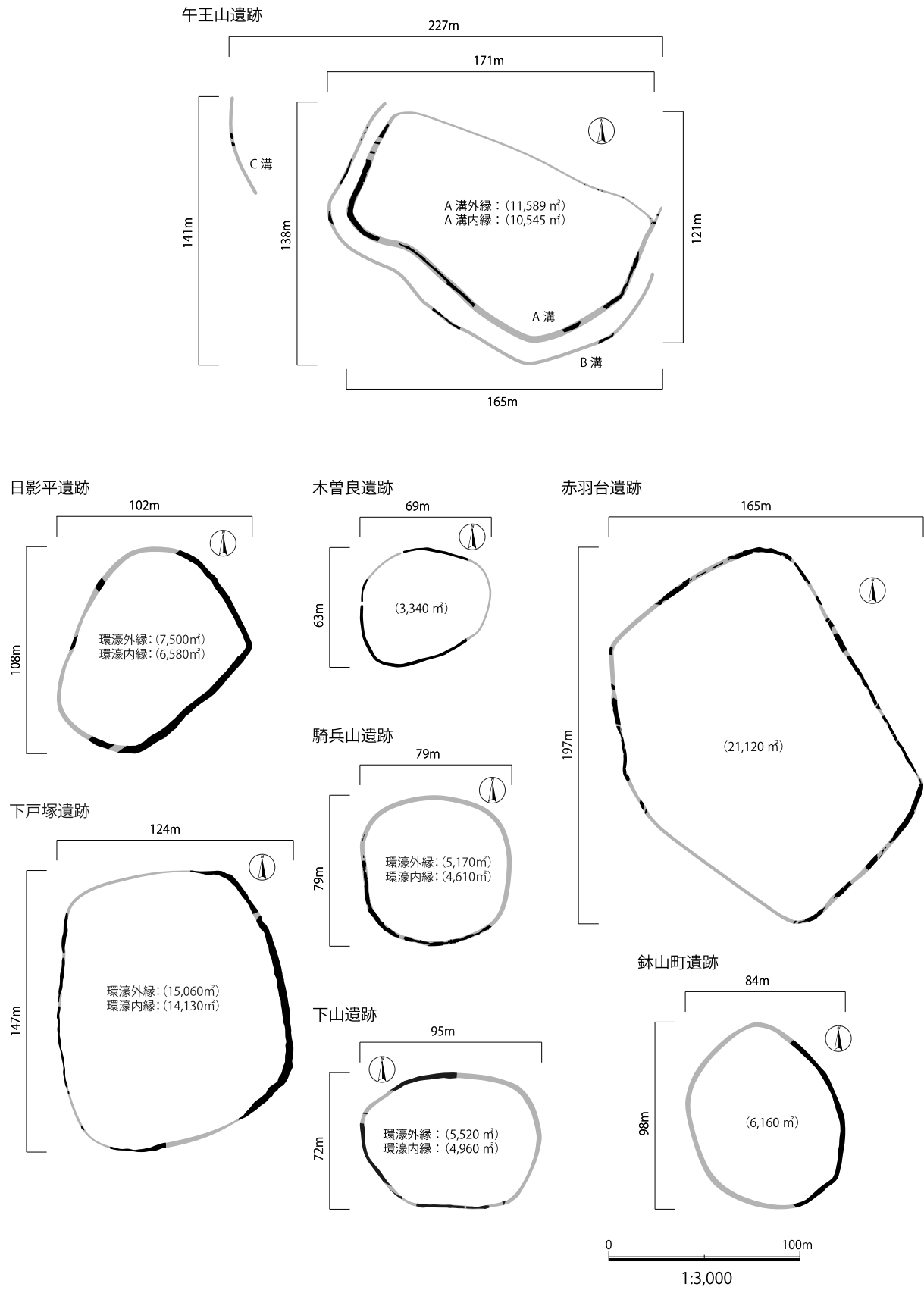
これら環濠集落に関しては、防御施設としての有効性についての議論が多く提示されている。これは先述の横浜市大塚遺跡の環濠の全貌が明らかになり、その姿が守りを固めた集落の姿を彷彿とさせるとしたことが契機のひとつとなり、その後佐賀県吉野ヶ里遺跡において大型の環濠集落が発掘されたことによって増幅された見解であるように感じられる。環濠を防御施設として評価し、社会の緊張状態に対応したものとする見解は根強い（佐原 1979, 都出 1983・89, 武井 1986 等）。しかし大塚遺跡の環濠発見以降も、その規模と内容から防御施設としては不十分であるとの認識に立ち、環濠の構築に集落域を占有して集団の結束を示すための「標」としての理解を加える論（本堂 1976）もみられ、現状では東日本の多くの環濠の防御施設としての実用性については多くの論者が懐疑的な立場を表明している（石黒 1988・90・96, 中間 1990, 篠原 1999, 久世 2001, 小出 2006・07・11 等）。

なお、安藤広道は択一的な議論では環濠の意義と広域的な定着を考えることはできないとして、環濠の機能を対立的に捉えるべきではないとしており（安藤 2003）、実用性に関する論点への過度の傾倒が環濠の意義に関する議論をミスリードしかねないことに注意を促している。

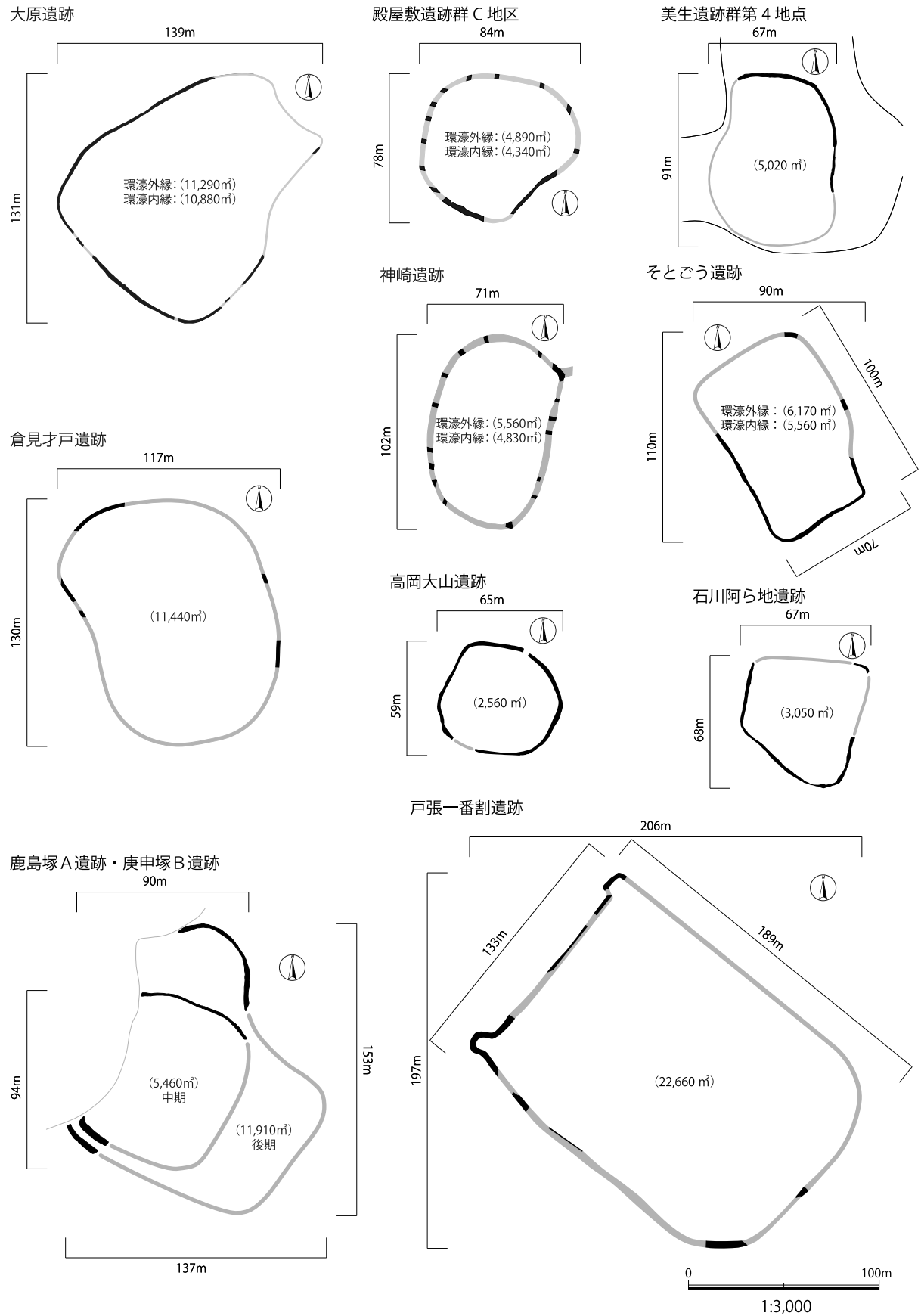
以上のような環濠集落に対する認識をもとに、午王山遺跡をどのように評価できるだろうか。以下では午王山環濠の特質について検討してみることにしよう。

c. 午王山環濠の特質

これまで述べてきたように、午王山遺跡は弥生時代後期前半期に属する多重環濠集落遺跡とみられる。集落面積はA溝とした環濠内側でおよそ 10,500 m²を測り、外側に掘られたB溝で区画する範囲も含めると、およそ 14,000 m²となる可能性もある。これは、関東地方の弥生時代の環濠として規模を推定することができる事例の中では比較的小型の部類に属することになる。しかしこれは中期の環濠集落の想定面積の平均が 20,000 m²を前後するためであり、推定復元可能な後期の環濠集落の平均値（約 7,900 m²と想定）からみると、弥生時代後期としては大型の部類に入る。同じ後期の環濠として規模の上で最も近いのは、神奈川県横浜市のおっぱら大原遺跡（鈴木重ほか 2011, 第 226 図）であり、同県寒川町の倉見才戸遺跡（押木編 2006, 第 226 図）もその可能性があるが調査範囲が限定されており確実ではない。これを超える規模の環濠は、東京都北区赤羽台遺跡（大谷編 1992, 第 225 図）、新宿区下戸塚遺跡（菊池ほか 1996, 第 225 図）などであり、14,000 ～ 21,000 m²の面積となる。関東地方の弥生時代後期に限っていえば、午王山遺跡は比較的大型の部類に入り、残存度が高く調査も進み情報量の多い良好な環濠集落遺跡といえよう。



第 225 図 関東地方の弥生時代後期から古墳時代前期における環濠の規模比較 (1)
(小倉 2015 を改変)

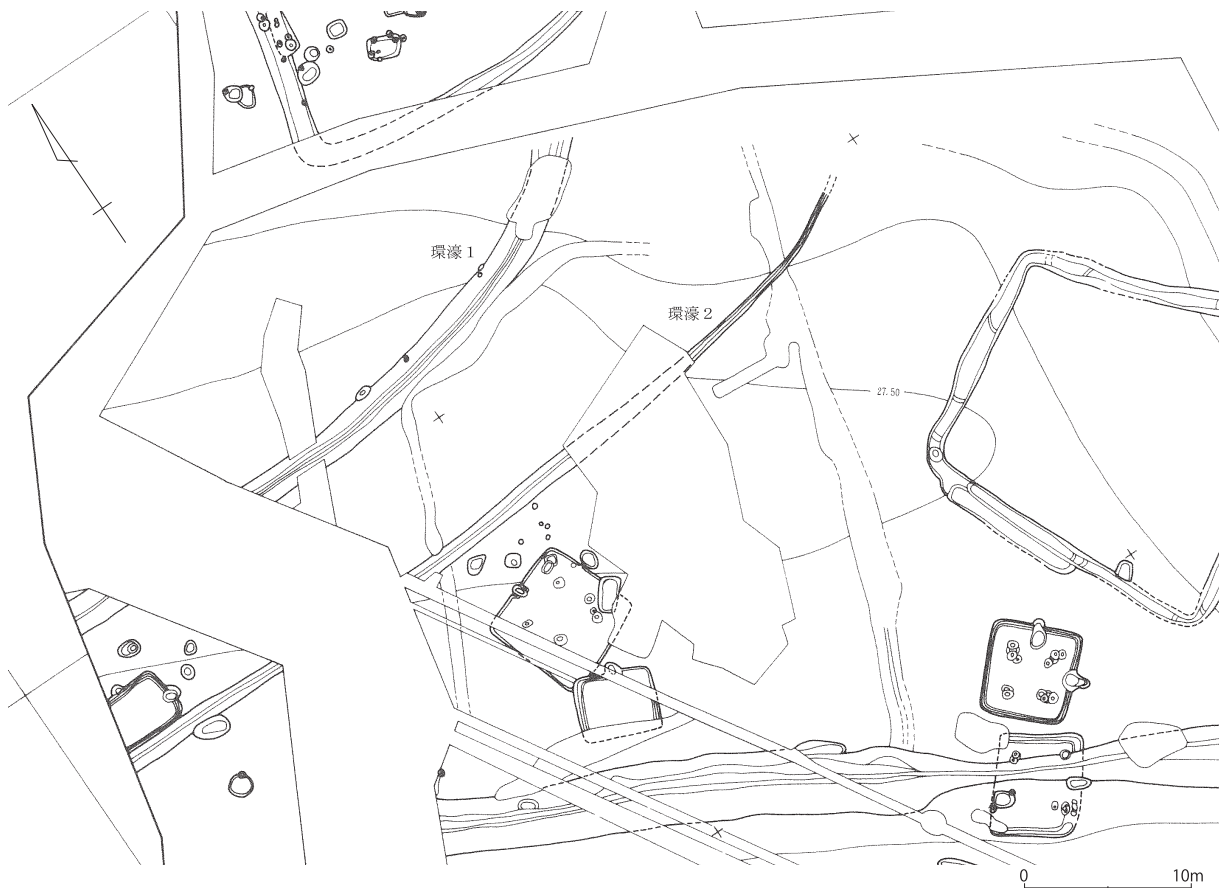


第 226 図 関東地方の弥生時代後期から古墳時代前期における環濠の規模比較 (2)
(小倉 2015 を改変)

また、午王山遺跡の立地は荒川低地を見下ろす独立した台地上にあり、特異な様相を示している。丘の上を占めた集団が最高所をめぐる環濠を設置してその場所に継続的に居住した事例といえるだろう。環濠の断面幅や深さから実用的な機能について積極的な評価はできないが、後期の環濠集落としてみれば、A溝の断面積は残りのよいところでは先述の下戸塚遺跡や神奈川県綾瀬市神崎遺跡（比留川ほか 1992，第 226 図）のそれに匹敵する。後期としてはしっかり作られた環濠であると評価することができる。

さらに午王山遺跡の大きな特徴は、多重環濠にある。多重環濠そのものは九州地方をはじめとして多数確認されており、環濠の情報に本来的に伴う要素のひとつとみられるが、関東地方ではあまり注目されてこなかった。その理由は明らかで、全貌の推定できる遺跡の中に、多重環濠とされるものがこれまでほとんど存在しなかったためである。したがって、午王山例が二重の環濠であるとすれば全体像を推定できる貴重な事例となる。

中期後半段階においては、複数の溝を検出した集落遺跡として、神奈川県秦野市砂田台遺跡（穴戸ほか 1989）、千葉県袖ヶ浦市西原遺跡（伊藤 1999）などがみられるが、砂田台遺跡は出土する宮ノ台式土器の検討の結果、中期に属する溝が時期を違えて営まれた例であることがわかっている（安藤 2013）。また西原遺跡は部分的な調査であり全体像や細分時期がはっきりせず、溝が並走するとも考えにくい。溝が複数存在するからといって、直ちに多重環濠集落とは認定できない難しさがある。同様に、千葉県木更津市鹿島塚A遺跡・庚申塚B遺跡（岡野編 1994・1997，當眞編 2001，簗島編 1992，第 226 図）の事例も一見すると二重環濠



第 227 図 花ノ木遺跡で検出された溝（新屋ほか 1994 を改変）



第228図 中里前原遺跡第1次調査区で検出された溝（秦野ほか 1980 を改変）

にみえるが、内側は中期の溝、外側は後期の溝だという。

一方、後期の埼玉県域には和光市花ノ木遺跡（新屋ほか 1994）、さいたま市中里前原遺跡（秦野ほか 1980）で複数の環濠をもつ集落遺跡の報告がある。

花ノ木遺跡では舌状に伸びる台地を断ち切るように内側から環濠1・環濠2の2条の溝が検出されている（第227図）。軽くカーブを描きながら東西に並走する溝であり、外側の環濠2はやや規模が小さい。この規模の差は午王山によく似ていると考えられ、興味深い。ただし、部分的な検出であり、環濠集落の全体像は判明していない。小出輝雄は「環濠の内外に存在する方形周溝墓と竪穴住居跡の時期」によって環濠の時期を久ヶ原期としている（小出 2007）。環濠2からは出土遺物が少なく、土器の点からは両環濠の同時性を強調することは困難である。

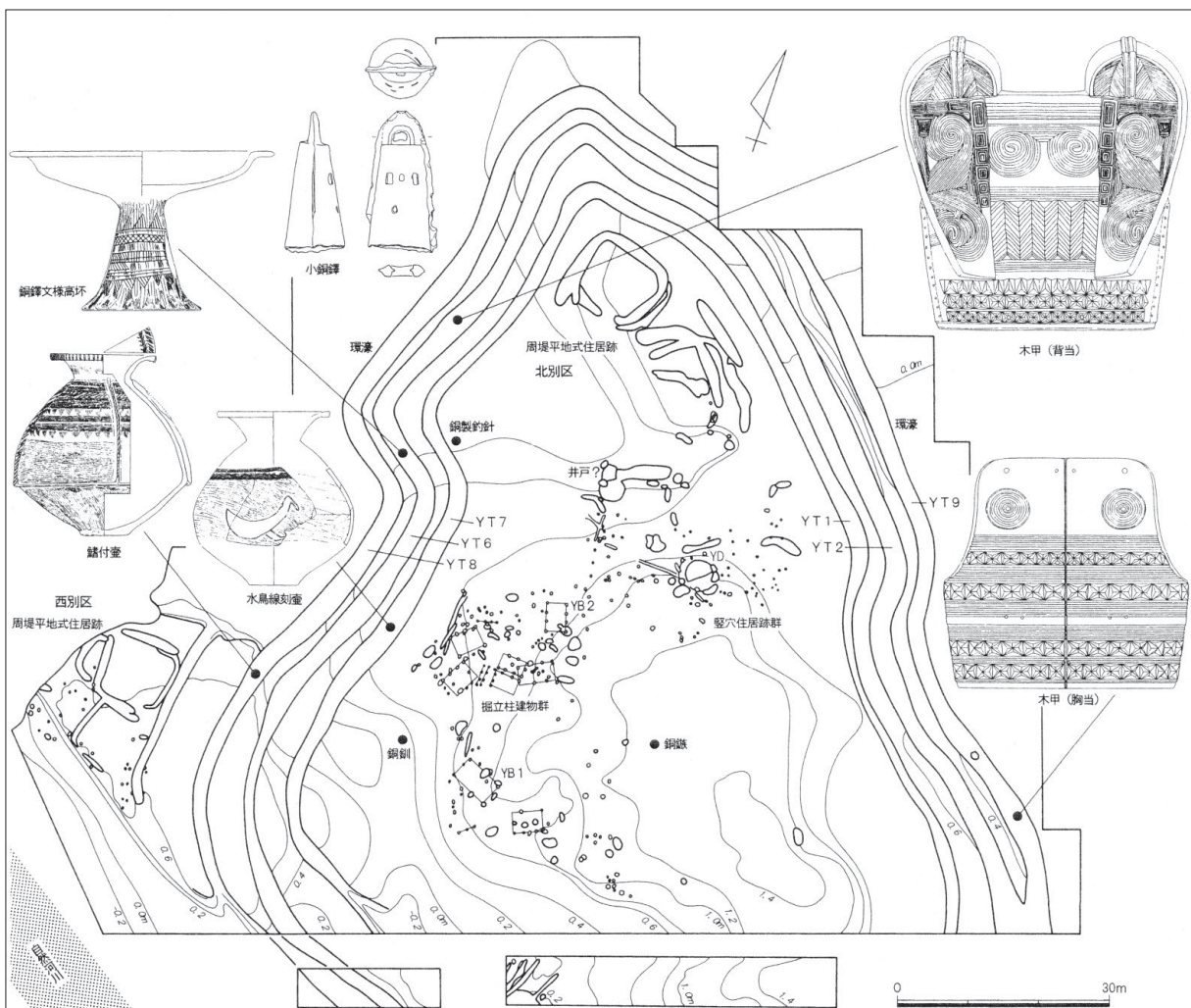
中里前原遺跡では第1次調査において3条の溝の存在が報告されている（第228図）。確かに内側の2条の溝は並行し、最も外側の溝も類似したカーブを描いており、多重環濠の可能性がある。報告書には外側から「1号V字形壕」「2号V字形壕」「3号箱形壕」と命名された溝がみられ、2号・3号は近接して並走するようにみえる。しかしながら、両溝は名前からもわかるように断面形状が異なり、同一の性格を持つ同時展開の溝と考えることは躊躇される⁽⁸⁾。1号は2号に比して小型の溝で、その点では午王山遺跡のB溝に類似するかもしれないが、同時性を推定する根拠には未だ乏しい。報告書においてはあらゆる可能性を提示しながらも、3条の溝の同時性には慎重な態度が示されている。また、これ以降の調査を

含めても溝の全体像は明らかになっておらず、集落の規模についても明確にしない。

これらに比して午王山遺跡は全体像が想定可能で、なおかつ集落変遷も追うことができる点では、きわめて多くの情報を得ることができる遺跡であることがわかる。

さて、このように関東地方においては特異な存在ともいえる午王山遺跡であるが、環濠内の集落の様子は弥生時代後期における一般的な環濠集落と大きな違いはなさそうである。関東地方では中期の環濠集落においては環濠内に竪穴住居跡が密集するように分布し、大塚遺跡のように高床倉庫とみられる建物も認められる例がある。また、一般的な竪穴住居跡よりもかなり大型の住居跡が内部に含まれることもあり、大型方形周溝墓が単独または少数、集落内に営まれる例も見受けられる。後期の遺跡においては多数の竪穴住居跡が残される傾向はあり、大型の竪穴住居跡も存在するが、集落内に営まれる特殊な方形周溝墓などは顕著ではない。午王山遺跡も大小の竪穴住居跡が高い密度で分布するもので、関東地方の環濠集落内部の基本的な構成から逸脱するような性格はみせていない。

一方、東海地方において午王山遺跡と時期が近く、同規模かそれに近い多重環濠集落の著名な事例として静岡県浜松市伊場遺跡（鈴木敏ほか 2008）が挙げられる。低地に営まれ、南北約 150m、東西約 120m の広さで平面形が瓢箪形をしており、幅 11 ～ 14m の範囲に三重の



第 229 図 伊場遺跡の多重環濠（鈴木敏ほか 2008 より）

環濠がめぐるもので、溝と溝との間には土塁が存在するとされる。南東部分が未調査であるが、並走する溝の様子からは弥生時代後期における同時性が明らかである。溝内からは木甲なども発見されており、総括報告書では「十分に防禦用の機能を備えていたと言える」とされている（同：79頁）。しかしながら、伊場遺跡は北側に広がる大規模環濠集落である同時期の梶子遺跡⁽⁹⁾（井口ほか2017）に隣接し、環濠内から脱した首長居館の様相を呈するものと評価されており（寺沢1998）、環濠内部も掘立柱建物や周堤を持つ平地式の住居跡によって構成されるなど、大小多数の竪穴住居跡が環濠内に密集する午王山遺跡とは全く異なる性格を持つものと推定される。

こうしてみると、竪穴住居という比較的等質な居住施設を多数配置する午王山集落が独立丘状の台地に占地して多重環濠を掘るという状態は、後期段階の集落として独特のあり方を示しているのではないだろうか。中期以来の環濠集落内の住居配置を形態的に維持しつつ、関東地方には少ない多重環濠を設置することは、午王山における環濠集落の一般性と特異性の両面をあらわしているように見受けられる。こうした点でも集落の全体像を推定復元することができる午王山遺跡は、東日本の弥生時代社会全体を検討する上で重要な事例といえるだろう。

おわりに

以上のように、午王山遺跡における環濠の全体像ならびに関東地方を中心とする東日本の環濠集落からみたその特質について論じてみた。今回の検討の結果、午王山遺跡が関東地方における弥生時代後期の環濠集落としては比較的大型であり、環濠そのものもよく掘り込まれていることがわかった。また、類例の少ない多重環濠集落として復元することが可能であり、独立した台地上に立地するといった特異性を有することも確認できた。こうした特性は弥生時代後期の関東地方の集落のあり方を考察するために有効な視点を提供するものと考えられる。環濠集落には当時の社会関係が投影されていることは間違いなく、荒川流域の弥生時代後期社会をより深く検討していくために、本遺跡例は欠くことのできない事例として大きな価値をもつことが明らかとなった。

今後は、午王山遺跡それ自体の復元や内部構造の検討を進めるとともに、午王山遺跡を核とした荒川流域の後期集落遺跡の諸関係を検討し、その変遷過程に一定の見通しを立てることが必要となろう。すでに関東地方では鶴見川流域の遺跡群において中期の集落群に関する議論が深まりつつある。河川と可耕地の規模において鶴見川流域を超えるスケールをもつこの地域で集落の展開課程や集落群の動態を明らかにすることによって、東日本の集落研究にさらに豊かな知見を加えることができるだろう。午王山遺跡の検討は、弥生時代社会の解明につながっているのである。

本稿をまとめるにあたっては、石川日出志、遠藤英子、柿沼幹夫、佐藤康二、鈴木一郎、鈴木敏弘、前田秀則、埼玉県教育庁市町村支援部文化資源課、和光市教育委員会事務局の各位にご助言を賜った。記して感謝申し上げる次第である（敬称略）。

【註】

- 1) 小宮は調査原図から推定値を計算したものとみられるが、筆者は後に発掘調査報告書をもとに再計算を試みた（小倉 2015）。その際にはB環濠で 2,915 m³という値を得ている。同様にA環濠についても計算すると 1,896 m³となり、掘り直された環濠は労働量の上では節約の進んだものであることが推定された。
- 2) 筆者は関東地方の環濠の規模を推定する際に残存率の高い環濠断面積をとりあげて推定復元を行った（小倉 2015）。当時の生活面が残されている例は限られていることから、断面の残存度に応じてA～Fの類型を設けて検討の前提とした。今回新たに検討した午王山遺跡は類型Eに分類される（第 220 図）が、これは「溝の上面が削平を受けている、あるいは断面図と環濠長軸のなす角度が不明瞭などの理由で、断面の規模が不明確なもの。比較的残りのよい断面から面積を推定せざるを得ない場合が多い。」という基準に則ったものである。
- 3) ただし第 217 図に表現した通り、遺跡北部の溝などは比較的小規模であるとも考えられる。
- 4) 小出輝雄はこれを「濠の掘り上げた土を盛ったと考えられる土盛り状遺構」と考え、「防御のために有効であるほどの高さの土塁を築いているとも思えない」ことから、「防御力を増強するためのものではなく、「館」的な意味合いにつながる」と考えている（小出 2011）。
- 5) 現地遺跡公園では整備に合わせて集落入口として木橋が再現されたが、実際にピットが残っていたのは開発のために削平された環濠西端部である。
- 6) 横浜市権田原遺跡において環濠内に複数の硬化面を検出している。調査そのものは 1980 年代であるが、同遺跡は関東地方で環濠の規模の判明しているものとしては最大級の集落遺跡である。
- 7) 横浜市折本西原遺跡は鶴見川本流に面する台地上の環濠集落で、集落としての総面積は 70,000 m²以上と見込まれている（石井ほか 1980）。ただし、調査は部分的に行われているに過ぎず、全域を環濠によって囲まれているかどうかは不明で、台地の南北で確認できる溝は時期を異にする可能性もある（小倉 2017）。
- 8) 3号箱形濠には第6号住居跡・第7号住居跡が重複しているが、第6号住居跡との新旧関係は明らかでなく、第7号住居跡は3号箱形濠よりも新しいという所見が提示されている。
- 9) 梶子遺跡は伊場遺跡など周辺の諸遺跡とともに伊場遺跡群を構成し、集落は砂堤列上に広く展開している。これまでに 20 次を超える発掘調査が行われており、本稿では最近の調査例として第 18 次調査の報文を掲げた。

【引用・参考文献】

- 赤塚次郎ほか 2002 『猫島遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 107 集 財団法人愛知県教育サービスセンター愛知県埋蔵文化財センター
- 安藤広道 1990 「神奈川県下末吉台地における宮ノ台式土器の細分」（上）・（下）『古代文化』第 42 巻第 6・7 号（pp. 28-38, 13-24）
- 安藤広道 1991 「弥生時代集落群の動態-横浜市鶴見川・早淵川流域の弥生時代中期集落遺跡群を対象に-」『調査研究集録』第 8 冊 横浜市埋蔵文化財センター（pp. 133-164）
- 安藤広道 1992 「三殿台遺跡の再検討-弥生時代中期の遺構群を対象として-」『調査研究集録』第 9 冊 財団法人横浜市ふるさと歴史財団（pp. 71-86）
- 安藤広道 2013 「弥生時代集落遺跡の分析方法をめぐる一考察」『横浜市歴史博物館紀要』第 17 号 横浜市歴史博物館（pp. 81-95）
- 井口智博ほか 2017 『梶子遺跡 18 次』浜松市教育委員会
- 石井 寛 2010 『大槲杉山神社遺跡・歳勝土南遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告 43 財団法人横浜市ふるさと歴史財団

- 石黒立人ほか 1991『朝日遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 30 財団法人愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人 1988「伊勢湾沿岸地方の〈囲郭集落〉をめぐる若干の問題」『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会 (pp. 462-470)
- 石黒立人 1990「濠のある集落とない集落」『季刊考古学』第 31 号 (pp. 19-23)
- 石黒立人 1996「戦いの中の弥生ムラ」『市民の考古学 3 発見と考古学』名著出版 (pp. 241-275)
- 伊藤伸久 1999『西原遺跡Ⅱ』平成 11 年度千葉県袖ヶ浦市市内遺跡発掘調査報告書Ⅱ 袖ヶ浦市教育委員会
- 大谷 猛編 1992『赤羽台遺跡』東北新幹線赤羽地区遺跡調査会
- 大村 直ほか 2005『市原市根田代遺跡』上総国分寺台遺跡群調査報告書ⅩⅢ 財団法人市原市文化財センター調査報告書第 92 集 財団法人市原市文化財センター
- 岡野祐二編 1994『千葉県木更津市請西遺跡群Ⅲ 鹿島塚A遺跡』(財)君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 84 集 財団法人君津郡市文化財センターほか
- 岡野祐二編 1997『千葉県木更津市請西遺跡群 鹿島塚A遺跡』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 84 集 財団法人君津郡市文化財センター
- 小倉淳一 2015「関東地方における弥生時代の溝」『環濠集落の諸問題 2015』環濠論集刊行会 (pp. 21-51)
- 小倉淳一 2016「弥生時代中期環濠の造営時期と地域社会-印旛沼周辺地域を対象として-」『阿部朝衛先生還暦記念論集』阿部朝衛先生の還暦を祝う会 (pp. 12-27)
- 小倉淳一 2017「弥生時代中期の南関東地方における環濠の造営期間」『法政考古学』第 43 集 (pp. 1-40)
- 押木弘己編 2006『倉見才戸遺跡-第 9 次調査ほか発掘調査報告書-』寒川町埋蔵文化財調査報告書第 3 集 寒川町教育委員会生涯学習課
- 甲斐博幸ほか 1996『常代遺跡 第 1 分冊 常代遺跡縄文〜古墳前期編』財団法人君津郡市文化財センター発掘調査報告書第 112 集 財団法人君津郡市文化財センター
- 柿沼幹夫 2019「午王山遺跡出土の弥生土器の編年的位置づけ」(本書第Ⅴ章第 3 節, pp. 177-218)
- 河合英夫ほか 2015『中里遺跡発掘調査報告書』玉川文化財研究所
- 川畑和弘ほか 2017『下之郷遺跡発掘調査報告書 総括編』守山市教育委員会
- 川道寛ほか 2016『原の辻遺跡 総集編Ⅱ-平成 17 年度から平成 26 年度までの調査成果-』長崎県埋蔵文化財センター調査報告書 18 長崎県教育委員会
- 菊池徹夫ほか 1996『下戸塚遺跡の調査 第 2 部 弥生時代から古墳時代前期』早稲田大学阿部球場跡地埋蔵文化財調査報告書 早稲田大学
- 久世辰男 2001『集落遺構からみた南関東の弥生社会』六一書房
- 呉地英夫ほか 1997『中里遺跡第Ⅲ地点発掘調査報告書』小田原市文化財調査報告書 61 小田原市教育委員会
- 小池雅典 2003『日影平遺跡 沼田市立沼田南中学校新設工事等に係る埋蔵文化財発掘調査報告書』沼田市教育委員会
- 小出輝雄 2006「環濠は戦争用遺構か-南関東弥生時代中期後半期の検討から-」『古代』第 119 号 (pp. 57-77)
- 小出輝雄 2007「環濠の性格についての再考察-埼玉県内の例を中心として-」『埼玉の弥生時代』六一書房 (pp. 364-378)
- 小出輝雄 2011「続・環濠は戦争用遺構か-戦争(戦い・いくさ)への有効性・土塁の性格を中心として-」『古代』第 126 号 (pp. 63-79)
- 小宮恒雄 1991「Ⅵ. 考察 2. 環濠の性格 b. 環濠の構築」『大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告ⅩⅡ 横浜市埋蔵文化財センター (pp. 444-449)

- 佐原 眞 1979「弥生時代の集落」『考古学研究』第25巻第4号 (pp. 11-32)
- 穴戸信吾ほか 1989『砂田台遺跡Ⅰ』神奈川県立埋蔵文化財センター調査報告20 神奈川県立埋蔵文化財センター
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1985『川合遺跡 静清バイパス (川合地区) 埋蔵文化財発掘調査の概要』
- 静岡県埋蔵文化財調査研究所 1990『川合遺跡 (遺構編) 本文編』
- 篠原和大 1999「タイプサイトの実像-弥生町遺跡-」『文化財の保護』第31号 東京都教育委員会 (pp. 131-142)
- 渋谷 格ほか 2015『吉野ヶ里遺跡』佐賀県文化財調査報告書第207集 佐賀県教育委員会
- 鈴木重信 2017「「大型ピット1」・「大型ピット2」の再検討」『横浜に稲作がやってきた!?!』横浜市歴史博物館 (pp. 62-63)
- 鈴木重信ほか 2011『大原遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告44 横浜市教育委員会 公益財団法人横浜市ふるさと歴史財団埋蔵文化財センター
- 鈴木敏則 2008「第5章 時代別総括 第1節 弥生時代」『伊場遺跡総括編 (文字資料, 時代別総括)』浜松市教育委員会 (pp. 79-89)
- 第2阪和国道内遺跡調査会 1970『池上・四ツ池』第2阪和国道内遺跡調査会
- 武井則道 1986「弥生時代の南関東」『岩波講座日本考古学5 文化と地域性』岩波書店 (pp. 187-222)
- 武井則道編 1991『大塚遺跡』港北ニュータウン地域内埋蔵文化財調査報告XⅡ 横浜市埋蔵文化財センター
- 都出比呂志 1983「環濠集落の成立と解体」『考古学研究』第29巻第4号 (pp. 14-32)
- 都出比呂志 1989『日本農耕社会の成立過程』岩波書店
- 寺沢 薫 1998「集落から都市へ」『古代国家はこうして生まれた』角川書店 (pp. 103-162)
- 當眞嗣史編 2001『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅶ 庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡』木更津市教育委員会
- 中島 宏 1984『池守・池上』埼玉県教育委員会
- 中間研志 1990「環濠集落の構造」『季刊考古学』第31号 (pp. 29-33)
- 新屋雅明ほか 1994『花ノ木・向原・柿ノ木坂・水久保・丸山台』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第134集 財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 秦野昌明ほか 1980『中里前原遺跡 一第1次発掘調査報告書一』埼玉県与野市中里前原遺跡調査会
- 浜田晋介 2011『弥生農耕集落の研究-南関東を中心に-』雄山閣
- 比留川聡ほか 1992『神崎遺跡発掘調査報告書』綾瀬市埋蔵文化財調査報告2 綾瀬市教育委員会・綾瀬市史調査会・神崎遺跡発掘調査団
- 福田一志ほか 2005『原の辻遺跡 総集編1 平成16年度までの調査成果』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集 長崎県教育委員会
- 藤田三郎ほか 2009『唐古・鍵遺跡Ⅰ 範囲確認調査』田原本町文化財調査報告書5 田原本町教育委員会
- 松尾 宏ほか 2001『平塚川添遺跡Ⅰ 福岡県甘木市大字平塚字川添所在遺跡の調査・平塚工業団地造成に伴う発掘調査報告書Ⅱ』甘木市文化財調査報告書 第53集 甘木市教育委員会
- 松尾 宏ほか 2004『平塚川添遺跡Ⅱ 福岡県甘木市大字平塚字川添所在遺跡の調査・平塚工業団地造成に伴う発掘調査報告書Ⅲ』甘木市文化財調査報告書 第64集 甘木市教育委員会
- 簗島正広編 1992『請西遺跡群発掘調査報告書Ⅳ 庚申塚A遺跡・庚申塚B遺跡・山伏作古墳群第22号墳』木更津市教育委員会
- 吉田 稔ほか 1991『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第95集
- 和島誠一ほか 1965『三殿台 横浜市磯子区三殿台遺跡集落址調査報告』横浜市教育委員会